

📖 今月のおすすめ本 📖

『ヒロインはいつも泣いている 「女だから」悩む歌舞伎の女性たち』

著者名 関 亜弓
出版者 淡交社
出版年 2023
分類番号 774.04/セ

歌舞伎役者になりたい！と思っていた筆者が、「女である」ということで訳者になれないことに愕然とします。歌舞伎の女性の役は「女方」という男性ながら女性を演じる役者が担うからです。ヒロインを生身の女性とは違う女方が演じる人物と捉えれば「美しい」「悲しい」と純粋に思えるが、同じカテゴリーの女性として見ると、「かわいそう」「相手の男が許せない」という生々しい感情が溢れ、息苦しさを覚えてしまうといえます。ヒロインたちに救いはないのか、本書は「自分がもしあの立場だったら」と徹底的な女性目線で歌舞伎のヒロインたちを解剖した本です。

主筋や恩ある将の子を守るため自分の息子の命を犠牲にする母、というのは今の時代ではなかなか理解できないですが、現代の価値観で断罪するのではなく、我が子の命にさえ決定権のない母たちの忍ぶ、「小刻みに震える背中」姿の存在をフォーカスしています。悲しみに打ちひしがれる女性たちだけでなく、四角関係で男性を取り合い最後には女性の強さを見せる「しらけるねえ」というセリフも紹介しています。

著者は「歌舞伎の舞台に女性が立てない理由」のベストアンサーとして、目指すべき女性像が明確だから「女方」が成立し、それに違和感を覚える生身の女性は歌舞伎を演じることに向かないのだ、と述べています。コラムもちりばめられていて、時代背景や歌舞伎の入門編としても最適です。

📖 女性・歌舞伎ではこんな本も！

『女を観る歌舞伎』

【774/サ】

酒井 順子(2014)文藝春秋

『落語がつくる 〈江戸東京〉』

著者名 田中 優子 /編
出版者 岩波書店
出版年 2023
分類番号 779.13/ラ

本書は、落語は長屋やさまざまな場所と人間関係が「事実そのまま」ではなく、江戸時代の現実を要素としながらも、その後の時代に物語として作り上げられてきたのではないか、私たちが何らかの形で日々「つくっている」江戸東京とはなんなのかを、11人の研究者が様々な切り口から述べています。

そもそも落語には、いくらか前の時代の「共有された記憶」を語り、それを聴衆が楽しむという性格がある。それはやや曖昧ではあるが時間の幅を適度に持たせながら、また場所のありようを反映させながら、落語独特の「フィクショナルにしてリアルな世界」をつくりあげていきます。

また、長屋という空間は共用部分が多く女性には特に遠慮がない生活空間で、格差を感じることなく見栄をはる必要もない。この長屋のもつ活気・気のおけない雰囲気は、長屋がある種のユートピアと感じる所以ですらあります。その中で生活する女性たちは、何かしら仕事をしていて経済的事情で自分の意に沿わないことにはならないという所は現代に通じていて面白いです。そんな中女性は、「腕はいいが酒飲みの旦那」や「礼儀を知らない職人」などと対を成す、旦那を更生させる「賢さ」や旦那の手助けをする「かかの知恵」などが際立っています。また、身を持ちくずした親の肩代わりに娘が犠牲になるという話もあり、当時の孝行とは…と考えさせられます。

📖 落語の本です

『おせいさんの落語』【913.6/夕】

田辺 聖子(1974)筑摩書房

『聖家族の終焉とおじさんの逆襲 両大戦間期ドイツ児童文学の世界』

著者名 佐藤 文彦
出版者 晃洋書房
出版年 2022
分類番号 909/サ

第一次世界大戦を経て、ドイツ帝国も崩壊、戦後の混乱と同時に生じた社会変動、技術革新、都市化など、世界恐慌前のドイツは「黄金の二〇年代」を迎えたといわれています。ベルリンの人口は世界第三位となり、文化的活況の中、大都市を舞台にした児童文学が書かれ始めました。

両大戦間期のドイツ児童文学の特徴として、第一次世界大戦後の父権の失墜に象徴される家族形態の変化が影響しています。そこでは父が戦死や負傷で家庭内の権威を失くし、その父に代わり息子の成長に影響を及ぼす成人男性、すなわち「おじさん」が登場し子供に良くも悪くも影響を与えていきます。本書は、その「おじさん」に着目した多様な「おじさん文学」を紹介したものです。

ただ、影響といっても父に代わりおじさんが同じ成長モデルになることはなく、別のモデルを示しています。例えば、日本でもよく読まれているエーリヒ・ケストナーの旅するおじさん文学『五月三十五日』ではおじさんが、すべての男が強くなく弱くてもいいということを身をもって教えて少年の成長に大きな役割を担っています。そんなおじの一面も知ってしまいながら親しみを持ち、南洋の旅行という秘密の共有により、お互いの存在が父親と息子の関係より近づいています。

難しい専門書にみえますが、読むと楽しい「おじさん文学」紹介本です。ぜひ手に取ってみて下さい。

📖 ドイツの昔話といえば グリム

『グリムへの扉』【940.268/オ】

大野 寿子／編(2015)勉誠出版